
探しものが見つからない

七紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探しものが見つからない

【著者名】

Z8807C

【作者名】

七紀

【あらすじ】

探す、探す、探す。一日中探しても見つからない。探しものが見つかり喜ぶ者、探すことであきらめる者、探し続ける者。さて、俺はいったいどれなんだろう。探しものを通して哲学的になつたり、ならなかつたりする物語。

(前書き)

別短編「紅の桜」とリンクしている部分がありますので、そちらを先に読んでもらったほうが楽しみが増すと思います。
後書きまで読んでいただければ幸いです。

我が家に帰ってきた。

探しものが見つからない

探しものというのは、誰にでもあるだろ。人によつてそれは財布や携帯のように形あるものだつたり、愛や希望のように形の無いものだつたりするかもしれない。だが、それがいつも簡単に見つかると限らない。探しものが見つかり喜ぶ者、探すことをあきらめる者、探し続ける者。
さて、俺はいつどれなんだろう。

今日は散々な日だ、なぜなら探しものが見つからないのだ。

朝起きて、学校に行つて、授業を受けて、昼飯を食べている間にも探していたのに見つからない。

おかげで先生にも注意されてしまった。

綾人に一緒に探すよう頼んだのだが、どこか浮世離れした雰囲気を持つその友人は大事な約束があると言つて足早に帰ってしまった。

人付き合いの悪いあいつが約束だなんて珍しい。

人付き合いが悪いからこそ、適当な理由で断られたとも考えられるが。

しううがないので一人で帰路を急ぎ、今に至る。

テーブルの下に屈みこむ ない。

冷蔵庫の隙間を覗き込む ない。

引き出しを片つ端から開ける ない。

押入れのふすまを引く ない。

ごみ箱のふたを開く ない。

ない。どこにもない。

しかしどうして人間というものは無いと分かつている場所もいちいち調べないと気が済まないのだろうか。

微かな希望を持つて探し、やはりという落胆を見つける 不毛だ。

なにやら疲れたので、ソファに座り込む。

と、外から呼び声がした。

「 ルカ。どこにあるのだハルカ！」

小学生くらいの少年の声だ。

きっと少年も家族やらペットやらを探しているのだろう。

次第に声が遠ざかっていき、聞こえなくなつた。

小学校で流行つてゐるのか、時代劇のような呼びかけだった。

……やはり外かもしれない。

そう思い、玄関に向かつたところで違和感を覚える。

気持ち悪いような、何かを忘れてゐるような。

「あ

探しものって何だっけ？

これは困った。

探しものが何なのかを探す羽目になると洒落にならない。
一体何なんだろう。

財布はある。
携帯もある。

家の鍵は……いけない忘れた。

急いで取りに戻り、再び玄関。

しかし、無くしやすいものと言つたらこれくらいのものだろう。

教科書やノートぐらいならここまで躍起にならないだろうし、他に

なくして困るようなものも無い。

記憶に残っていないことは、大したものではないのかも知れない。

いや、そうすると朝から必死に探していた俺は何なのだろう。

……考えすぎて、頭がぼわぼわする。

まるで夢を見ているような、そんな感覚。

そのときガチャッ！と玄関が開いた。

「探しものは見つかった？」

「……なんだ綾人か、驚かせるなよ。手伝いに来ててくれたのか？」

「いや、僕の探し者が見つかったから報告に」

「探し者？」

「うん、姉さんが見つかったんだ」

「それって、……たしか行方不明の」

「うん、だから幸太郎の探しものは僕が見つけてあげるよ。その前に……」

ポケットに手を突っ込み、何かを取り出す。

「これ必要なことだからよろしく、幸太郎」

ブツツ。

こんな音がしたと思う。

痛みは無い、が、自分の腹にナイフが突き刺さっている状況はあまりにシユールで、笑えなかつた。

「アハハツ……」

アハハハハハハハツと、堰を切つたように笑い出す綾人。シユールすぎる。

「というかこれ、俺死んじゃうんじゃね？」

自分でも不思議に思うくらい、冷静だつた。

とにかく逃げなれば。

綾人を押しのけ外に出る。

しかしすぐに立ち止まつた、といつよつ立ち止まらざるを得なかつた。

道が無い。

道だけでなく、家も電柱も外灯も全てが塗りつぶされたかのように真つ黒で、世界は暗闇で出来ていた。

後ろを振り返つても、既に我が家も綾人もいなかつた。

ただ闇だけがある世界で、綾人の狂笑だけが響き渡る。

いつしか世界が暗闇なのか、瞼を閉じているだけなのか、それすらも分からなくなり、ただ確実に世界は黒に染まつた。

ブラックアウト。

「 はつ 」

がばりと起き上がる。

寝汗がひどく、服が濡れて気持ち悪いし、気分も悪い。
だが俺は安堵した。

「 夢か…… 」

そりやそうだと思う。

途中からのシユールな展開はあまりにありえない。
というより、探しものを見つけるために、何故死ななきやならんのだ。

そもそも俺には探しものなんて無い、無くしたものなんて無いのだ。
無いもの探し出すのは無理な話だらう。

……しかし、もしかしたらいじつやつて人は忘れていくのだろうか。
何かを忘れ、それが何なのか忘れ、やがてはそれを探す理由をも
忘れる。

そして忘れ去られたそれはひつそりと消えていくのだろうか。
俺が思い出せないだけで、ひょっとしたら何かを忘れているのかも
しない。

探しものは確かにあるのかもしれない。

不毛だ。

こんな哲学的な俺はキャラじやない。
あんな夢を見たせ이다。

明日、殺されたお礼に綾人を殴ろうと誓つ。
と、外から呼び声がした。

「 ルカ。どこにあるのだハルカ！ 」

思わず飛び上がり、急いで窓を開けた。

「ハルカ！ そこにいたのか！」

視界に少女と黒猫が飛び込んだ。

少女が黒猫を抱き上げる。

それを見て力が抜けてしまった。

正夢だつたらどうしようと思った自分が恥ずかしい。頬が染まる。
でも良かった、少女は無事にペットを探し出せたのだ。
しかしまた違和感が襲う。

確かに呼び声は少年の声だったような気がしたのだが……。

「ずいぶん探したんだぞ、ハルカ」

黒猫が、そう口を開いた。

(後書き)

「コンセプトは「世にも奇妙な物語」です。
言われて見ればそんな感じ、と思つていただけたのであれば幸い
です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8807c/>

探しものが見つからない

2010年12月22日14時50分発行